

鏡の中の Poésie

—Mallarmé における処女の綱目—

佐々木 滋 子

1 血の Aphrodite

Mallarmé という署名の許に一括される以下の *textes* を 我々はここでは *Hérodiade* という未完の作品を構成する諸部分として読んでゆく。このような *lecture* を我々に許すものは そこである特有な現われ方をする一連の形姿——処女——である。 *textes* 全体の共通項となつて *lecture* を導くこの処女の形姿を まず *Hérodiade* の最終的形態である *Les noces d'Hérodiade* から引き出そう。様々な詩篇 断片 *notes* からなるこの *texte* は 終に書かれなかったある唯一のシーンを目指しているが そのシーンは *préface* の次の言葉

l' (Hérodiade) isorer comme l'ont fait des tableaux solitaires dans le fait même terrible, mystérieux— et faire miroiter ce qui probablement hanta, en apparue avec son attribut—le chef du saint.⁽¹⁾

から Saint Jean の切られた頭こうべの前に処女の裸身を顕わにする Hérodiade と推察することができる。このシーンが実現するものは *noces* という *titre* からも明らかのように 処女 Hérodiade の婚礼であるが そこに濃厚に漂う血の匂いはその婚礼がまた死でもあることを示している。聖者の死 だがまた婚礼であるからには処女性の死でもあるこのシーンが成就する時 彼女を覆うペールは引き裂かれ Aphrodite のように だが血の中から生まれた Hérodiade の裸身⁽²⁾が 初めて顕わになる。それはこの婚礼——死にその処女性を捧げて斃れる母-Hérodiade の裸身であると同時に そこから誕生する真に不滅な純

潔に輝く娘 - Hérodiade の裸身でもある⁽³⁾。おぞましいまでに血塗れの官能の裡に処女性の不滅を輝かせるこの裸身は 我々にとっては一つの啓示となる。それは lecture を導く照明であると同時に Mallarmé の texte 全体の不在な中心となるものでもある。この裸身の裡に何が燦き またそれが何故この裸身として現われるのかを知らうとしながら 我々の lecture は再びこの裸身に帰ることになるであろう。

II 花の処女

この裸身を我々は生む者と生まれる者の一致と定義したい。それが処女の裸身という形姿をとって現われるということは この一致が女性的な生殖力に基いていることを推察させる。それに対して男性的なものは この裸身を出現させるある出来事——婚礼 - 死の中に処女性の全一性の破壊として潜在する死・冥界的なものに求められる。出来事の裡に隠されて 不可視な姿としてはあれ そこに男性的なものが 言わばこの裸身を顕わにするモメントとして介在していることは明らかであって そうでなければ裸身が生む者と生まれる者との一致として現われることはなかったであろう。だがモメントとしてのこの男性性 即ち死・冥界的なものは この処女の形姿から独立しているのではなく逆にその中に吸収されて 属性：attribut として持たれている。Hérodiade においてそうだったように もう一つの或いは最初の Hérodias においてもそれを指摘できる。明らかにこの女性的な生殖力に対して Mère と呼びかけている *Les fleurs*⁽⁴⁾ の《災いに汚されぬ未だ若々しい大地》に花開く目も彩な花々には はっきりと冥界的なものが備っているのである。

Des avalanches d'or du vieil azur, au jour
Premier et de la neige éternelle des astres
Jadis tu détachas les grands calices pour
La terre jeune encore et vierge de désastres,

Le glaieul fauve, avec les cygnes au col fin,
Et ce divin laurier des âmes exilées

Vermeil comme le pur orteil du séraphin
Que rougit la pudeur des aurores foulées,

L'hyacinthe, le myrte à l'adorable éclair
Et, pareille à la chair de la femme, la rose
Cruelle, Hérodiade en fleur du jardin clair,
Celle qu'un sang farouche et radieux arrose!

Et tu fis la blancheur sanglotante des lys
Qui roulant sur des mers de soupir qu'elle effleure
A travers l'encens bleu des horizons pâlis
Monte rêveusement vers la lune qui pleure !

Hosannah sur le cistre et dans les encensoirs,
Notre dame,⁽⁶⁾ hosannah du jardins de nos limbes !
Et finisse l'écho par les célestes soirs,
Extase des regards, scintillement des nimbes !

O Mère qui créas en ton sein juste et fort
Calices balançant la future viole,
De grandes fleurs avec la balsamique Mort
Pour le poète las que la vie étiole.

各々が美と純潔の輝きの裡に死の力を秘めたこれらの花々の中で とりわけ二種類の花に注目しなければならない。生的・地上的な昼の世界に花開く赤い薔薇と 死的・冥界的な夜の世界に咲く白百合である⁽⁶⁾。だがこの二つの花が全く別々なものであるとは考えられない。それは同一の土壌から生い立った一本の植物である女性的な生殖力の双つの相なのである。そして ここでは白百合が重要な相であるにせよ 主要なのは赤い薔薇 - Hérodiade であろう。《女の肉にも似た 残酷な薔薇 明るい苑に花開くエロディアド 獯猛な光輝く血に濡れる花》 従ってこの薔薇は血に濡れて赤いのであり その生的・地上的なものの中に明らかに死的・冥界的なものを殺戮の形で含んでいる。この

Hérodiade は 彼女を濡らす血によってかえって生気に溢れ 猛々しく繁茂する不滅の花なのである。その豊饒さには 苛烈な陽光が一瞬目の前を眩くするように 死と破壊の力が充満している。生と死が互いに陰画となっているこの薔薇- Hérodiade は 繰り返す死によって甦っては花開く植物の不滅を体現していると言えよう。

従って ここで花の処女たる Hérodiade はある分裂を生きている。彼女の血に濡れて赤い薔薇という形姿が示すのは 生の中に書きこまれた死 或いは死の中に書きこまれた生である。彼女の裡に含まれた モメントとしての死・冥界的なものが行方この書きこみは Hérodiade の全一性を分裂させて 彼女を言わば境界線上の存在として啓示するのである。こうして、この血に濡れた赤い薔薇は生と死の境界である冥府に花開き 更には 同じく生的・地上的な昼と死的・冥界的な夜の あわいの地平線上にある日没の太陽とも同一視される。だがここで この同一視が循環形態をとっていることに注意しなければならないまい。日没の《おおぞら老いた蒼穹の金の崩から解き放たれた Hérodiade の《女の肉にも似た》輝きは それを祝ぐ讃歌と花開き 再び空に昇ってゆき 《夕べの空の笹 眼差しの恍惚 輪光の輝き》となって日没の太陽の光の中に分散する。このような循環はまた texte の構造自体にも見出され 最終節の《生に疲れ色蒼ざめた詩人の為に 芳しく死の匂い立つ巨大な花々の 未来をこめた ガラス波璃を揺する花萼を 正しくも力強い胎の裡に創造り給うた おお母よ》は 第一節の《はじめ原初の日 老いた蒼穹の金の崩から おおぞら星辰の永遠の雪から かつて汝は 災いに汚されぬ未だ若々しい大地の為に 巨大な花萼を解放した》に再び帰帰して 花の死と再生が永遠に循環することを明らかにする。この循環の中では 境界線上の存在である花-太陽が示す分裂は 死と再生の間の転回点であり 言わばこの循環として現われる創造が象徴的に始動する点である。従って境界線上の存在であるこの花が生い立つ やはり境界であるこの冥府の苑が また生殖力の土壌たる母の胎でもあると texte が語る時 texte は 花開く Hérodiade という唯一の形姿の裡に 創造の象徴的な始動を体現するものとして 生む者と生まれる者との文字通り根元的な一致を実現しているの

である。Hérodiade が生きている分裂は この一致が妊む分裂に他ならない。分裂を妊んだこの一致が 彼女を 生と死の永遠の循環という形で絶えず反復される創造の 最も根本的な部分 言わばその象徴的な始源へと更新し この創造を動かしている力を彼女の裡に発現させるのである。ところでこのような永遠に反復されうる創造は 明らかに 理念的に言って真に原初的である *creatio ex nihilo* とは同一視されえない。nihil の概念はこのような創造の反復可能性を許容しないからである。従って この創造の原理となり それを動かしている力を 先程我々が推察したように 生殖力であると断言することができるが その時我々は婚礼を別の言葉で言いかえていることになる。今まで我々が見てきた Hérodiade の二つの形姿はこうして同一のものとなる。Hérodiade の裸身を血で濡らす婚礼一死は この裸身において創造の原理を啓示する供犠なのである。

Hérodiadeの裡に生む者と生まれる者との一致という形で開花しているものは 個の死と再生であり それらを通して顕在化し また存続する 個を超えたある全体的なものである。この全体的なものは創造の力—生殖力として現われる以上 その理念によってしか言うことができない非実体的なものである。従ってこの力を代表し またそれによって形造られているこの理念が何であるかが次に問題となるだろう。ここで *Les fleurs* の最終行《生に疲れ色蒼ざめた詩人の為に》は ある方向付けを与えてくれる。この一行から我々はここで創造とは詩的創造以外のものではないことを理解する。この力は詩の生殖力—詩が自らを生み出す力なのである。これは我々の問題の範囲を厳密に明確化するものである。詩的創造はもはや昔く主体のレベルではなく、純粋に書かれたもの 或いはむしろ今書かれつつあるもののレベルで考えられている。このレベルにおいて詩的創造の力（の理念）を 我々は問題にしなければならないのである。

Ⅲ 日没の処女——*l'intermédiaire*

Mallarmé の処女はまた日没の太陽の相の許にも顕われる。

J'apporte vivante (et préservée à travers les ans par la science souveraine) une Femme d'autrefois. Quelque folie, originelle et naïve, une extase d'or, je ne sais quoi! par elle nommé sa chevelure, se plie avec la grâce des étoffes autour d'un visage qu'éclaire la nudité sanglante de ses lèvres. A la place du vêtement vain, elle a un corps ; et les yeux, semblables aux pierres rares, ne valent pas ce regard qui sort de sa chair heureuse : des seins levés comme s'ils étaient pleins d'un lait éternel, la pointe vers le ciel, aux jambes lisses qui gardent le sel de la mer première. ⁽⁷⁾

Le phénomène futur のこの日没の処女は *Les fleurs* の花の処女 Hérodiade と同一の現われであるように思える。《永遠の乳が漲るかに盛り上った乳房 天を突く乳首から 始源の海の塩を護る滑らかな両脚まで》豊饒な猛々しい生气に満ち 血に濡れたその裡身には 激しい生殖力が横溢している。だが裸身のこの猛々しさにもかかわらず、この散文詩の最終行 《une époque qui survit la beauté》⁽⁸⁾ は これが日没の太陽に同一視される詩の美の死の光景であることを明らかにしている。日没が太陽の血塗れの殺害であるように 美もまた真紅の殺戮の中でその最後の光芒を投げているのである。その光芒——日没の 最も豊かで狂的な恍惚の裡に 言語を絶して 燃えあがっているものは 太陽の輪光に他ならぬ 髪である (《無垢で素朴な 何らかの狂気 金の恍惚 何と言うべきかは知らず 彼女によってその髪と名付けられたものが 唇の血塗れの裸形が照らし出す^{おもぎし}貌の周囲に 布のような優美さをもって 襲なす》)。常に美の殺戮が凄惨な豪華を極めれば極める程より美しく燃えあがる それ自体一つの^{いきもの}生物のようなこの髪にこそ *Les fleurs* の Hérodiade の血に濡れて赤い薔薇との同一性は求められるであろう。明らかに Hérodiade に見出されたと同じ分裂である日没のこの供犠は ここで死と同時に生誕を与えてもいる。日没の紅の苦悶は 供犠に斃れた者の死の苦悶であると共に そこから生れる者の頭われようとする苦悶でもあるのだから。

この髪は後年の sonnet *Victorieusement fui le suicide beau* では文字通り日没の死の後の唯一の遺産として 深夜炎もあげず燃え広がり 花に変容す

る⁽⁹⁾。同じように だがこの死から生まれる者を求めるなら そこに曙 (le jour) がある。後に *Don du poème* として完成する *le jour* は 日没の死の後の暗い不毛な夜を徹した書くことの果てに 詩として生まれるものを示す。

Je t'apporte l'enfant d'une nuit d'Idumée !
Pâle, à l'aile saignante et noire, déplumée,
Par le verre eurichi de grands parfums et d'or,
Par les carreaux battus, hélas ! mornes encor
L'aurore s'acharna sur ma lampe angélique.⁽¹⁰⁾

昌頭の *Le phénomène futur* との著しい類似に注意しなければならない。ここでもたらされるのは再び処女——だがもはや死の苦悶の中にその生の光芒を投げる日没の処女ではなく 夜を徹した現われようとする苦悶によって血に濡れ 未だこの苦悶の死の影を揺曳した曙の処女——なのである。*Le phénomène futur* と *Le jour* は同一の供犠の夜を挟んだ双つの頭われである。これを日没の死の苦悶の中に曙の生誕の苦悶を書きこむことと言いかえるなら 夜はそれを書きこむインクの中にある⁽¹¹⁾。

ce jeu insensé d'écrire, ..., en vertu d'un doute——la goutte d'encre apparenntée à la nuit sublime——⁽¹²⁾

Écrire——

L'encrier, cristal comme une conscience, avec sa goutte, au fond, de ténèbres relative à ce que quelque chose soit.⁽¹³⁾

インクの闇の滴が凝^こったかの暗黒は そこに何ものとも知れぬ躊躇^{ためらい}もしくは非決定性 (doute) として止^{とど}まっている何かの存在を証す。この何かこそ詩的創造の力なのであるが 詩人の行である書くことの徹夜は それを潜勢的・可能的な doute から 力の十全な発現へと移行させる processus として理解される。écriture は書かれたものとしてだけでなく書く行為としても この力が発現する以前という意味で始源である夜が隠していたものを明るみに出す供犠なのであり この徹夜が流すインクは 日没一曙の供犠の血の紅へと その

doute を気化させて 書かれ終る時明確な痕跡を顕わにする。この痕跡こそ lecture が詩として読みとるもの 創造の力の十全な発現である筈のものである。sonnet *Quand l'ombre menaçait de la fatale loi* は 書くことの徹夜の果てのこの気化の紅を示唆している。

Quand l'ombre menaçait de la fatale loi
 Tel vieux Rêve, désir et mal de mes vertèbres,
 Affligé de périr sous les plafonds funèbres
 Il a ployé son aile indubitable en moi.

Luxe, ô salle d'ébène où, pour séduire un roi
 Se tordent dans leur mort des guirlandes célèbres,
 Vous n'êtes qu'un orgueil menti par les ténèbres
 Aux yeux du solitaire ébloui de sa foi.

Oui, je sais qu'au lointain de cette nuit, la Terre
 Jette d'un grand éclat l'insolite mystère,
 Sous les siècles hideux qui l'obscurcissent moins.

L'espace à soi pareil qu'il s'acrotisse ou se nie
 Roule dans cet ennui des feux vils pour témoins
 Que s'est d'un astre en fête allumé le génie.⁽¹⁴⁾

この紅の裡に燦く異様な *Mystère* とは一体何なのか。 *La Musique et les Lettres* はそれについてこう述べている。

on possède, avec justesse, les moyens réciproques du *Mystère*—
 oublions la vieille distinctions, entre la *Musique* et les *Lettres*,
 n'étant que le partage, voulu, pour sa rencontre ultérieure, du cas
 premier.⁽¹⁵⁾

la *Musique* et les *Lettres* sont la face alternative ici élargie vers
 l'obscur ; scintillante là, avec certitude, d'un phénomène, le seul,
 je l'appelai l'Idée.⁽¹⁶⁾

Mallarmé の *texte* では 音楽と文芸は常に美的創造の唯二つしかない形態であると「えるが その根底には唯一にして同一なある理念が存在する。それが音楽と文芸を美的創造の形態たらしめている以上 この理念は我々がここで創造の力と呼んできたものの理念であると考えることができる。この理念は音楽と文芸という相反する手段によって 夜のインクの中への濺勢をとかれ夜の果てに投げられた曙光のように輝き 明らかになる。従って音楽と文芸が各々独自のやり方で行うこの行為が ここで *Mystère* と呼ばれているものである。同じ *texte* の次の条り

cette célébration de la poésie, dont nous avons parlé, sans l'invoquer presque une heure en les attributs de Musique et de Lettres : appelez-la Mystère ou n'est-ce pas le contexte évolutif de l'Idée.⁽¹⁷⁾

は それがまた *Poésie* の執行とも呼ばれることを理解させる。音楽にまれ詩にまれ *Poésie* はそれ自体が一つの戯れとして成立していながら その戯れによって その戯れの裡に 理念を顕在化させ啓示する。従って書くこととはまず *Poésie* のこの戯れを書くことであり それが *Poésie* を執行することなのである。この戯れにおいて *Poésie* はそれ自らを 美的創造の力の理念の *contexte évolutif* として展開させ そうすることによってそれ自体が一つの *Mystère* として顕現する。それが夜の果ての曙光として 或いはまさにこの曙光である処女として顕われるべきものに他ならない。こうして *Poésie* は詩であると同時に詩として生まれる行為 創造の具体的運動として理解される。我々が創造の力と呼ぶものの理念 この力によって形造られ またこの力を代表している理念は この運動としての *Poésie* なのである。

書くことは *Poésie* のこの運動の *processus* に他ならない。従ってそこでは 詩人はもはや創造の主体であるどころか その全くの傍役 言わば介添役にすぎない⁽¹⁸⁾。創造の主体は詩人から力としての *Poésie* に完全に移譲されているのである。詩人の徹夜は この力が自らの発現を目指す暗く長い熟成の間となる。この熟成は鉋物という位相の許に現われている。 *Le phénomène futur* の死そのものとしての日没は 詩の美の現身^{うつつみ}である処女を 夜一地中深

く没しようとする太陽の形姿の裡に示した。だから確かに処女は その豊饒な裸身には似げない貴石のような瞳（《貴石に似た瞳は 至福の肉から出でることの眼差しには値しない》）によって 既に半ばは地中に埋もれた鉱物であることを明らかにしているのである。この地中への埋没は創造の力の夜の中での潜在と等価な意味を持つ。鉱物の処女は インクの滴に潜む doute の具体的形象であり 言わば地中に懐胎された *petra genitrix*（生殖の石）なのである。*petra genitrix* はまた *matrix mundi*（世界子宮）即ちあの母の胎とも同一視されている⁽¹⁹⁾。それは未だ人知れず眠る胎児であると同時に、十分に活性化していない不毛の胎なのである。

Et la viole est là, méchante, qui s'appuie
 Au lieu de faire jaillir en vierge fuie
 Le rêve
 Qu'un ventre chaste et creux
 Sur un lit vierge et froid d'une horreur maternelle
 Dans quelque noir baiser.⁽²⁰⁾

Ouverture のこの異文は処女の鉱物の相がやがて *Hérodiade* に受けつがれることを教えている。今まで我々がその諸相を眺めてきた日没の処女は 花の処女 *Hérodiade* と鉱物の処女 *Hérodiade* の双つ^{かお}の貌を持った 文字通り日没一夜の始まりに立つ処女 *l'intermédiaire* なのである。

IV *Hérodiade* の死と再生

Poésie の執行——創造の力を *doute-petra genitrix* から詩の天へと発現させる行為としての書くことは *Les noces d'Hérodiade* では二つのやり方で実践的に試みられている。一つは *petra genitrix* の熟成の *processus* を *métaphorique* に提示すること これが *texte* の物語のレベルを構成する。もう一つはインクに潜む *doute* を書きこみによって気化させること これが *texte* の *écriture* のレベルを構成する。この二つのやり方 或いはそれが構成する二つのレベルは、熟成一気化の果てにあの紅として顕現する *Hérodiade*

の裸身において合一する。そこに我々は 十全な美として現われた Poésie を
 見ることができるだろう。

(a) *Hérodiade* の供犠

Hérodiade の裸身は *Hérodiade* という唯一の語の裡に既に書きこまれて
 いるものであったとすることができる。この語の発想が *Hérodiade* の構想を
 決定しただろうことは明らかである。

La plus belle page de mon œuvre sera celle qui ne contiendra que
 ce nom divin *Hérodiade*. Le peu d'inspiration que j'ai eu, je le dois
 à ce nom, et je crois que si mon *héroi* ne s'était appelée Salomé,
 inventé ce mot sombre, et *rouge* comme une *grenade* ouverte,
Hérodiade.⁽²¹⁾

R.G.Cohn は *Hérodiade* という語の中に *Hérodiade-rouge-rose-Eros-*
héros-hérissé-heron Hérodiade-granade-diadème-diamant そして *Héro-*
diade-or-arôme etc という三つの音韻的グループを読みとっている⁽²²⁾。今引
 用した書簡の中でも既に *hero(ine)-rouge-grenade* は *Hérodiade* の中に読み
 こまれていた。これらの語は *Hérodiade* を *texte* の中に分裂・散乱させ⁽²³⁾
 その相互の音と意味の戯れによって *Hérodiade* を再構成する。例えば我々は
 J.Kristeva に従って *Hérodiade* という名が *Ouverture* の乳母の incantation
 の中で Cohn の読み取った最後のグループ *er-ro* が支配する *robe-ivoire-*
arôme-porte-ô roses-arôme-ors froids-rôlant-roi-froide-ivoire という音
 の連なりによって *texte* 内に呼び出されているのを見ることができるのであ
 る⁽²³⁾。ここでは *Ouverture* という予言の詩篇をとりあげて この戯れを瞥見
 してみよう。

Ouverture⁽²⁴⁾ は《*Abolie, et son aile affreuse dans les larmes Du bassin*》
 という冒頭によって 明らかに *le jour* の死の影をひきずった曙の紅に支配さ
 れている。この紅：*rouge* は《*Crime ! bûcher ! aurore ancienne ! supplice !*
Pourpre d'un ciel ! Étang de la pourpre complice !》によって 炎一太

陽一血の相互的な反映へと屈折・分裂させられ 末尾の《*Sa rougeur de crépuscule...rouge lever...La rougeur de ce temps prophétique*》において 日没の中に書きこまれた曙 というよりむしろ 《*Le moment d'évanouissement vespéral ou matinal*》⁽²⁵⁾ の rouge それ自体を示し Hérodiane の生誕—裸身の顕現を予言的に実現する。

Overture 全体を統御するこの Hérodiane-rouge は、その内部で更に細分され 散乱している。Cohn があげている *hérissé* (逆立つ髪) は語としては現われないが 後述するように鉾物の処女 Hérodiane の獅子の鬣たてがみのような髪である。それは更に裸身が顕現する時 血と太陽の同一視を介して、*Le phénomène futur* の処女の狂的な恍惚の裡に燃えあがる髪に重なる。先に我々はこの髪を sonnet *Victorieusement fui le suicide beau* の裡にも見出したが この sonnet の前身は *Overture* の異文に求められる。そこでは

La dame au nom trop pur ombrageant son visage
Comme un casque léger d'impératrice enfant
D'où, pour feindre sa joue il tomberait des roses.⁽²⁶⁾

と明らかに比喩的には髪である Hérodiane-*hérissé* は 更に *rose* を派生させる。この *rose* を既に我々は *Hérodiane* の前身とも言うべき *Les fleurs* の Hérodiane—血に濡れた赤い薔薇に見出している。diadème もまた語としてではなく その形から三日月を意味することによって《*Froide enfant...quand le soir méchant a coupé les grenades ! Le croissant, oui le seul est au cadrin de fer De l'horloge, pour poids suspendant Lucifer, Toujours blesse, toujours une nouvelle heurée, Par le clepsydre à la goutte obscure pleurée, Que, délaissée, elle erre, et sur son ombre pas Un ange accompagne son indicible pas !*》に現われる。grenade—diadème—diamant rouge—héron を含むこの一節は極めて複雑な métaphore と image の網目によって書かれている。Perséphone の神話でも明らかなように 死・冥界を象徴する grenade は死の時である夕べに摘まれる。この夕べの空にかかる三日月は時計の三日月形の振りとなり 一方で時の神の死の利鎌に亘

なって 聖者の斬首を導くが 他方では Lucifer 即ち暁の明星にも重なって 曙の紅の空にのぞまれるべき唯一の星の diamant を導く。この diamant は 一方で *Scène* の鮎物の処女の裸身にも また聖者の盲目の瞳にも重なるが それだけにまずとりわけ ptyx の sonnet の《le septuor de scintillation》を想起させる。この sonnet の最終節は

Elle, defunte nue en le miroir, encor
Que, dans l'oubli formé par le cadre, se fixe
De scintillations sitôt le septuor.⁽²⁷⁾

と明らかに後述する *Hérodiade* の婚礼との類同を示しているのである。従って婚礼はまさにこの星の裡に受肉された裸身—美の輝きとして成就するだろう (《que tu ne connais pas—laisse-moi à la place y verser regards joailleries—étoile—étoile et chair mariée et resplendissant de la vie qui s'éteint en tes yeux—》)⁽²⁸⁾。or が支配する ptyx の sonnet では この婚礼が実現し鏡の中に le septuor de scintillation (七つに分裂した金の燦き) が固定しようとする時 そこに顕現するのは 書くことの徹夜に輝く唯一の黄金たる北極星である。だが *Ouverture* は この夜の中で輝く 未だ夢想の中にある限りは ptyx の sonnet が接続法でしか語りえなかったものを 曙の光の中にもたらそうとする試みである。従ってここでは まず第一節の《Le diamant pur de quelque étoile, mais Antérieure, qui ne scintilla jamais》に 未だ分裂を知らぬ夜の星として現われる ptyx の sonnet の北極星 (diamant) は texte が行う分裂・散乱の供儀を経て 終に最終行の《Les diamants élus D'une étoile mourante et qui ne brille plus》では 曙の紅の中にその燦きを分裂・散乱させながら消滅—気化しようとする暁の明星に転移される。星の diamant のこの死は だが全てが紅 : rouge の中で顕在化することでもある。既に sonnet *Quand l'ombre menaçait de la fatale loi* にも見出したこの rouge は 先に述べたように 創造の始動としての、死と生誕の挟間であり、そこを *Hérodiade* (Elle) はインク (goutte obscure) とペン

(^{エール}aïle-plume-héron) によって彷徨う (^{エール}erre) 或いはむしろそこに連れてゆかれるのである。

さて cohn はまた héros と Eros の語源を共に Héra に求めている⁽²⁹⁾。女神としての Héra には その死すべき者には禁じられた裸身を冒瀆した Ixion を太陽の車に磔刑にするという神話がある⁽³⁰⁾。この神話に我々は聖者の斬首という Hérodiade の所行の遠い餌を聞きとることができる。 *Cantique de Saint Jean* では 斬首された聖者の頭^{こうべ}の飛跡は 夏至の日の太陽の行跡と重ね合されているのである。だがむしろ我々は héro (ine) と語源的に同一であるとされた Eros に関心を持つ。通例 Aphrodite の息子と目されている Eros は更に古い神話 オルペウス教徒の伝える神話⁽³¹⁾では 始源の夜である nuxe の妊んだ卵から生まれた者であった。彼はまた《^{エロス}顕す者》とも呼ばれたが 彼が顕わしたのはその卵の中に隠されていた世界《口を開けている : ouverture》を意味する chaos という語の本末の意味が示す世界である。従って Eros は 宇宙を創造の活性的状態へともたらす展開の élément としての愛の神なのである。Eros のこの神話を我々はそのまま Hérodiade のものとして読むことができる。この文脈に従えば Eros-héroïne-Hérodiade は《^{フクロト}最初に生まれた者》(それは Eros のもう一つの名である) としての enfant である。Hérodiade の血に濡れた裸身として啓示され、impératrice enfant とも呼ばれたこの子供の生誕をこそ *Ouverture* はそしてまた Hérodiade という名は予言しているのである。

こうして *Ouverture* は Hérodiade という唯一の語の texte 内への分裂・攷乱・再統合として書かれ Hérodiade の裸身の裡に顕現するもの (それは *Ouverture* の予言が示すものそれ自体である) を語のレベルで実現している。語のこの戯れは それ自体で供犠を実行していると言うことができる。それは Hérodiade に まず語のレベルである分裂を生きさせているのである。この供犠は更に *Ouverture* の予言が導き出し 語によって形造った Hérodiade によって 次いで texte の物語の中でも生きられることになる。

(b) 鮎物の処女

Scène の *Hérodiade* は鮎物の処女として現われる。彼女は噓せかえるような花の香に その処女性に対する明らかな脅威を嗅ぎとり 鮎物に化することによって処女性の永遠で全一的な不滅を生きようとするのである。

Laisse là ces parfums ! ne sais tu
 Que je les hais, et veux tu que je sente
 Leur ivresse noyer ma tête languissante ?
 Je veux que mes cheveux qui ne sont pas des fleurs
 A répandre l'oubli des humaines douleurs,
 Mais de l'or, à jamais vierges des aromates,
 Dans leurs éclairs cruels et dans leurs paleurs mates
 Observent la froideur stérile du métal,
 Vous ayant reflétés, bijoux du mur natal,
 Armes, vases depuis ma solitaire enfance.⁽³²⁾

宝石や金属の不毛で貧血症的な そしてそれ故に不壊な純潔に結晶しているこの *Hérodiade* の中で 花の処女が持っていた獯猛な生気を感じさせる唯一のものは ここでも再び髪である。だがそれも明らかに鮎物界に属していてその拒否の姿勢に威丈高な攻撃性を与える役を果たしている。獅子の鬣にも似たこの髪は *Hérodiade* を 正視するには余りに恐ろしい存在にしているのである。

Calme toi, les frissons de ta sénile chair,
 Viens et ma chevelure imitant les manières
 Trop farouches qui font votre peur des crinières,
 Aide-moi, puisqu'ainsi tu n'oses plus me voir,
 A me peigner nonchalamment dans un miroir.⁽³³⁾

この恐怖は明らかに、鮎物的なものが破壊と殺戮の形で含む冥界的なものに由来している。髪と同一視される金属類——*joyaux, armes, vase* は *Les noces d'Hérodiade* の *Prélude* の第一の詩篇 *Si, Génuflexion...*⁽³⁴⁾ を参照すれば 聖者の頭が乗せられる *plat d'or* とみなしうる。従ってここで冥界的なも

のは鉱物の処女を 死すべき者が決して見てはならない死それ自体に 呑みこむだけで決して生まない *matrix mundi* の暗い側面にしているのである。自らを生む為に開くのを拒むこの不毛さにおいて死であることが 彼女の自己同一性を保っている。彼女が花の生殖力に嗅ぎとるのは この自己同一性が否定される脅威なのである。そこから 婚礼—出産に対する拒否 (《*Avant que j'entre dans la ruelle Adieu chambre charmante* Chambre charmante, *adieu*, nuptiale déjà》)⁽⁸⁵⁾ 或いは生まれることの拒否 (《*Non! nul jour—de la belle fenêtre Elle n'a pas aimé, cette princesse, naître*》)⁽⁸⁶⁾ が生ずる。結局この脅威とは 自己同一性を分裂—再生に向って開くよう強いられることなのである。従って *Hérodiade* が拒むのは いかなる形であれ創造の輪の中に自らを参入させることである。こうして彼女は乳母とのあらゆる接触到 柵毛をふるう (《*Ce baiser, ces parfums offerts et, le dirai-je ? O mon cœur, cette main encore sacrilège, Car Tu voulais, je crois, me toucher, sont un jour Qui ne finira pas sans malheur sur la tour... O jour qu'Hérodiade avec effroi regarde !*》)⁽⁸⁷⁾。それは授乳によって以上に *Scène* の冒頭のその接吻によって 乳母が彼女を *texte* という分裂—再生の場に導入しているからなのである。

鉱物という相はこの脅威と拒否の相乗的な場であるように思える。拒否は脅威に対する最も *active* で *agressive* な抵抗の形として鉱物に化することを選ぶのだが その時鉱物の処女が生きてるのは この全的に不毛な死の自己同一性を守る為に 処女性を自らにのみ捧げるといふ形で婚礼を受け入れることなのである。

Oui, c'est pour moi, pour moi, que je fleuri, déserte ! ⁽⁸⁸⁾

に始まる *Hérodiade* の長い独白はそれを語っている。彼女は 深淵に終りなく埋もれた宝石 人知れず眠る黄金 つまりは自身である *matrix mundi* の裡に妊まれた *petra genitrix* である。だがそれは決して生まれも生みもしない為の埋没であり 彼女の不毛な処女性は永遠の地下の凍結の裡にその犯し難

きを保とうとするのである。だが彼女が夢想するこの不毛な妊娠の裡に 既に分裂は萌している。

Je me crois seule en ma monotone patrie
 Et tout, autour de moi, vit dans l'idorâtrie
 D'un miroir qui reflète en son calme dormant
 Hérodiade au clair regard de diamant...
 O charme dernier, oui ! je le sens, je suis seule.⁽³⁹⁾

ここで述べられているのは 鏡に映った自らの影との婚礼という 奇妙な言わば負の婚礼とでも言うべきものの夢想である。だがそこでは 彼女の自己同一性 彼女の孤りであること (《je suis seule》) は 見る者と見られる者という二重性の上に成立している。Syntaxe 上の故意の配慮が 彼女の裸身を見る眼差し (《le clair regard de diamant》)の所在を曖昧にしている結果 鏡はあたかも彼女の分身のように思える。Hérodiade は孤りであることの裡でこの分裂を生きているのである。従ってこの独白の末尾にある《je suis seule》は 冒頭の《c'est pour moi que je fleuri》と見事に対応している。《pour moi》と自らを一度び対象として分離した後 再びそれと結びつき 己を統合すること ここにしか 《je suis seule》は成立しえないのである。この《je suis seule》において 鉱物の処女 Hérodiade もまた明らかに 生む者と生まれる者との一致を体現している。だからまさにこの婚礼を選んだことが、彼女が自らに下した恐しい神託となる。それは 彼女がこの婚礼の為に 自らの裸身を映す鏡として何を持つことになるかを 言外に語っているのである。

(c) 血の処女

Les noces d'Hérodiade で *Scène* に続く *Scène intermédiaire* はこう終わっている。

M'en apporter le chef tranché dans un plat d'or.⁽⁴⁰⁾

聖者の斬首は Hérodiade という見らるべきでないものが見られる為の唯

一の方法である。斬首という形で外在化された鉞物の処女の殺戮的な力を引き
 上げることによって 聖者は死をもって 見てはならないものを見るという聖
 別を購う。彼は Hérodiade の絶対の純潔に輝く裸身を見る。

tête révoltée qui a voulu penser plus haut—
 Où s'éteinte l'idée inoui⁽⁴¹⁾

plus que par le glaive vain du bourreau, je meurs en mon martyre
 solitaire/idée fulgurante⁽⁴²⁾

Les noces d'Hérodiade のこれらの notes がそれを裏付けている。だが
 斬首はまず聖者を それが見ているものを決して見ない眼差しにしたのだった
 (《glace des yeux qui ne voient pas—ce qu'ils ont évoqué qu'ils ne
 verront jamais—》)⁽⁴³⁾。従って彼が見るのは そこに裸身が現われる鏡になる
 ことによってなのである。彼は Hérodiade の属性：attribut になる。鉞物の
 処女に内在していた死・冥界的相は それを引き受けた盲目の瞳の鏡に投影さ
 れて Hérodiade の分裂を顕在化する。この意味で聖者は Hérodiade の女性
 的な生殖力を発動させ 閉じた花卉を開かせるモメントとしての男性性である
 が その場合でも彼は Hérodiade の対等な配偶者ではなく むしろ その
 attribut(属性—付属物)なのである。こうして Hérodiade はその孤独な婚礼
 の闕に佇む (《Elle s'arrete an seuil solitaires noces》)⁽⁴⁴⁾。彼女の婚礼に
 とって 聖者の頭は不可欠なものである。それがなければこのシーンは Héro-
 diade という語の《割れた柘榴のように赤くて暗い》雰囲気に応わしいもので
 はなかったであろう。聖者の頭は 薔薇を濡らす血のように それとも鉞物の
 処女を映す鏡のように Hérodiade の内的な分裂を示すものなのである。

この婚礼で Hérodiade は裸身であると同時にそれを見つめる眼差しでもある。
 自己同一性のこの分裂を結局彼女の婚礼の実現と言う外はない。homo-
 gamie 或いは自己の二重なもの認識に他ならないこの婚礼において顕わになる
 裸身は 見る者と見られる者というこの分裂を生きる筈であった。

de l'un et l'autre sein laissant glisser tout voile—que l'étoile qui

scintille, chair—ce bijou—l’extinction de ton regard neutre—chaviré
en une idée-pour avoir voulu aller trop haut en pureté.⁽⁴⁵⁾

この裸身は 同じ notes によれば 日没一曙の処女のように、太陽に同一視される血に染まっている (《idée saigne-sang sur ses cuisses pourpre des cuisses et leur royauté》)⁽⁴⁶⁾。彼女を濡らすこの血の出自もまた両義的であるが 他方この血が重ね合されている太陽もまた日没一曙の両義性の中にある。Ouverture の rouge は更にそれらを炎にも屈折させていた。裸身を浸すこの紅は 結局再び《Hérodiade という割れた柘榴のように赤くて暗い語》の持つ ton (色—音調) に他ならない。従ってこの紅が 割れた柘榴のように分裂しながらも一つであるこの裸身を唯一の裸身——《Une virginité que c’est trop pour l’homme de rêver》⁽⁴⁷⁾ として立ちあがらせる。もはや見る者にも見られる者にも属さず その統合であるようなこの唯一の 最終的な裸身の 噴出する血汐のように唐突で力強い誕生の有様を *Finale* の最後の詩の冒頭はこう伝えている。

Jaillie avec l’éclair ordonné par son geste
La fiancée adorable et funeste
Dans sa gaine debout nulle de firmament⁽⁴⁸⁾

奔り出るこの裸身として 鉱物の処女 *petra genitrix* は Poésie の美の十分な開花を遂げたと言うべきであろう。そこに我々は Hérodiade の 生む者と生まれる者との完全な真の一致を見出すことができる。母にして娘である Hérodiade 或いは Aphrodite—Eros だが 何よりも Poésie という詩を生み出す力にして生み出された詩でもあるもの それがこの裸身として顕現すべきものなのである。それは Hérodiade という唯一の語の裡に夢想され 既に垣間見られていたものであった。そして書くこと—— Poésie の執行が その美を夢の外に分娩し Hérodiade の裸身として顕現させるのである。従ってこの意味で書くことは *petra genitrix* の熟成の為の錬金術的作業だと言える。そして確かに *Hérodiade* を序曲とする *œuvre* は 文字通り化金石の製造として企図されたのである (《mon œuvre, qui est L’Œuvre, le Grand’Œuvre,

comme disaient les alchimistes, nos ancêtres.》⁽⁴⁹⁾. œuvre のこの黄金は美学的な黄金 創造の Mystère の最も純粋な美としての現われである。それを生み出す化金石としての *Hérodiade* は Mystère と sous-titré されていた。従って *Hérodiade* は 創造の奥義 (Mystère) を *Hérodiade* の裸身として啓示する秘儀 (Mystère) であると言うことができる。

そこに Mystère が最も純粋な美として顕現する筈であったということは *Hérodiade* が Poésie として書かれたことと相俟って ここで Poésie を極めて特殊なものにしている。

La Venus de Milo... La Joconde du Vinci, me semblent, et sont, les deux grandes scintillations de la Beauté sur cette terre—et cet Œuvre, tel qu'il est rêvé, la troisième. . . La Beauté, enfin, ayant par la science de l'homme, retrouvée dans l'Univers entier ses *phases corrélatives*, ayant eu le suprême mot d'elle, s'étant rappélé l'horreur secrète qui la forçait à sourire—du temps du Vinci, et à sourire mystérieusement—souriant mystérieusement maintenant, mais de bonheur et avec la quiétude éternelle de la *Venus de Milo* retrouvée ayant su l'idée du mystère dont *La Joconde* ne savait que la sensation fatale.⁽⁵⁰⁾

Hérodiade について書かれたこの書簡では *Hérodiade* として Poésie が顕現させるべき美—Mystère の美的発現は 美についてのあらゆる texte の究極として想定されている。Poésie において Mystère は 神話においても芸術においても得られなかった 些かも曇りのない 自己認識に裏付けられた十全なその発現を可能にするのであり その時 Poésie の秘儀は Mystère を 神秘なまま だが全き理解可能性の裡にそれと示すのである。従って Poésie のこのような想定は 美的創造の形式の歴史を言わば書き直している。神話 芸術 そして Poésie という Mystère の三つの発現形式は Poésie を究極的到達とするこの歴史の諸段階として再組織される。Poésie は その裡に芸術ばかりか神話をも含み、同時に神話であり芸術であり だがそれ以上のもの それらの Synthèse として、ここに自らを実現しようとするのであ

る。神話・芸術・Poésie という美的創造の形式は 各々 固有の戯れに満ちた象徴的で暗示的なやり方で 創造の *Mystere* を提示して 宇宙を 独自な理解可能性と意味性の裡に啓示的に語る。だがこの固有な語り方は 神話を実在しないものについての *discours* という意味の許で また芸術を虚構という意味の許で 真理に関するものとしての *logos* や 事実に関するものとしての歴史と対立させ 更にはその下位に従属させた。従って その啓示の裡に自ずと明らかである美的創造と創造の坍塌たる宇宙との間の *phases corrélatives* に関して 神話は無意識の裡に 芸術は感性の裡に閉じこめられてきた。だが *Synthèse* としての Poésie は 美的創造の形式の自己認識であり 宇宙との *corrélations* を自覚して *logos* や歴史との対立・従属を超えた所に自らを位置させる。Poésie は もはや図形的に真理や事実性には拠らないことによって その戯れを創造の最も美的で至高な形式に純化するのである。従って Poésie はそれ自体が固有な そして唯一の 創造ですらあるだろう。それ以外の全ての創造は Poésie の卑俗な墮落した形式にすぎない。だからこそおそらく *texte* は当初から創造を Poésie (の一形態たる詩的創造) に限定していたのである。

Poésie のこのような想定は証明を要請する。だから それが *œuvre* 就中 *Hérodiade* で実践されたことである。従って *Les noces d'Hérodiade* の中で完成されたものが *Ouverture Cantique de Saint Jean* そして *Scène* 即ち予言・頌歌・潜在であるというのは暗示的である。それは Poésie を鏡の中においた。《ジョコンダがその宿命的な感覚だけしか知らなかった *mystère* の理念を知って再び見出されたミロのヴィーナスの永遠の静謐を湛えた》*Hérodiade* の裸身の現身^{うつつみ}への *delivrance*⁽⁵¹⁾ (解放一分娩) を《一人の生涯では足りな》かったこの途方もない試みは 別の眼差し——この鏡を眺める眼差しに委ねたのである。

註

(1) *Les noces d'Hérodiade* p. 51.(2) *Aphrodite* は海の泡から生まれた。Cf Mallarmé *Les dieux antiques* Œuvres

Complète de la Pleiade p. 1198.

- (3) Hérodiade は model となった伝説の中では、人物としては Salomé に相当するが、Hérodiade という名自体はその母のものである。
- (4) OC pp. 33-34.
- (5) Pleiade 版でも nrf 版でもこの部分は Notre Dame となっているが、それは notre dame の誤植であると鈴木信太郎氏が指摘している。(岩波文庫「マラルメ詩集」p. 159).
- (6) 赤い花が生、白い花が死を表すことについては、Cf 西川直子氏「〈花〉の変容 その一」東京都立大学人文学報 No. 102.
- (7) *Le phénomène futur* OC p. 269.
- (8) *ibid* p. 270.
- (9) Cf OC p. 68.
- (10) OC p. 1438.
- (11) これが *Ouverture* の試みになる。
- (12) *Villiers de L' Isle-Adam* OC p. 481.
- (13) *L'action restreinte* oc p. 370.
- (14) OC p. 67.
- (15) *La Masique et les Lettres* OC p. 649.
- (16) *ibid*, p. 649.
- (17) *ibid*, p. 653.
- (18) ここから *Le jour* の母をして生ませる父=詩人の motif, またこの徹夜から頻死で生まれた赤児=詩を養う *berceuse*=詩人の motif が生ずる。
- (19) Cf M・エリアーデ「鍛冶師と錬金術師」第四章 せりか書房。
- (20) *Les noces d'Hérodiade* pp. 155-156.
- (21) corr I p. 154. (Hérodiade 以外の強調は筆者)
- (22) R.G.Cohn : *Un coup de dès* p. 278.
- (23) J.Kristeva : *La révolution du langage poétique* p. 446.
- (24) *Les noces d'Hérodiade* pp. 141-152, OC pp. 41-43. (強調は筆者)
- (25) *Les noces d'Hérodiade* p. 139.
- (26) *ibid*, p. 158.
- (27) OC p. 69.
- (28) *Les noces d'Hérodiade* p. 116.
- (29) R.G.Cohn 前掲書 p. 278.
- (30) Cf *Les dieux antiques* OC p. 1190. また、K・ケレーニイ「ギリシアの神話上」p. 177.
- (31) Cf K・ケレーニイ 前掲書 pp. 29-30.

- ② *Les noces d'Hérodiade* p. 65, OC p. 45.
 ③ *ibid.* p. 64, OC p. 44.
 ④ *ibid.* pp. 55-56.
 ⑤ *ibid.* p. 163.
 ⑥ *ibid.* p. 159.
 ⑦ *ibid.* p. 66, OC p. 45.
 ⑧ *ibid.* p. 68, OC p. 47.
 ⑨ *ibid.* p. 69, OC p. 48.
 ⑩ *ibid.* p. 73.
 ⑪ *ibid.* p. 111.
 ⑫ *ibid.* p. 122.
 ⑬ *ibid.* p. 103.
 ⑭ *ibid.* p. 82.
 ⑮ *ibid.* p. 137.
 ⑯ *ibid.* p. 138.
 ⑰ *ibid.* p. 132.
 ⑱ *ibid.* p. 83.
 ⑲ corr I p. 244.
 ⑳ corr I p. 246.
 ㉑ Cygne の sonnet 第二節に «Un cygne d'autrefois se souvient que C'est lui
 Magnifique mais qui sans espoir *se delivre* Pour n'avoir pas chanté la
 région où vivre Quand du stérile hiver a resplendi l'ennui» OC p. 63, (強
 調筆者) がある。
 ㉒ *Autobiographie* OC p. 663.